

国際会議報告

2025 中国伝統色彩学術年会参加報告

Report of Participation in the 2025 Annual Academic Conference on Chinese Traditional Colors

國本 学史

Norifumi Kunimoto

慶應義塾大学 / 共立女子大学

Keio University, Kyoritsu Women's University

1. 2025 中国伝統色彩学術年会

著者は本稿において、2025年11月7-8日に中国浙江省杭州市にある中国美术学院象山校区において開催された、「2025 中国伝統色彩学術年会」の参加報告を行う。中国伝統色彩学術年会は2016年より開催され、本年の2025年で10回目の開催となる。北京の芸術研究院以外の開催地で開催されたのは、2022年の天津美术学院での開催以来となる。ただし2022年は講演者がオンラインで参加する形式であった。著者は中国伝統色彩学術年会に、2018年より継続的に招聘されて参加している。本学術年会は、中国国内各地から招聘された研究者等の他、これまでイギリス、フランス、韓国、香港、マカオ、台湾、日本等から専門家が招聘されている。本学術年会における日本との研究交流の重点的な継続が、本年も確認された。中国伝統色彩学術年会は、今後も継続的な開催が目指されている(図1)。



図1 開催会場の中国美术学院 著者撮影

2. 2025 年中国伝統色彩学術年会の規模・形式

2025年の中国伝統色彩学術年会は、講演総数40件である。その内2件は、日本からの講演者(東京芸術大学教授・日本画家の荒井経氏及び、筆者である慶應義塾大学の國本学史)であった。また基調講演は4件で、中国美术学院教授宋建明氏、台湾・雲林科技大学名誉教授曾啓雄氏、敦煌研究院研究員趙声良氏、東京芸術大学教授荒井経氏、が務められた。例年は重点的な交流対象である日本からの参加者はずっと多いが、本年は招聘された参加予定者の都合等の関係か、最終

的な日本からの参加者は2名となった。講演会場が複数にわたったこともあり、通訳は翻訳内容が会場内放送されるのではなく、通訳者が日本人参加者に付いて逐次通訳した。日本からの講演者は翻訳を考慮し、講演時間は30分が与えられた。

本年度の累計登録者数は2111名に及び、当日の参加者を合わせるとさらに多数の参加者が推定される(聚焦「聚焦」“2025 中国传统色彩学術年会”在杭州召开 {<https://mp.weixin.qq.com/s/D9ChAwlr42monHKn3j7pLAj>}2025年11月8日記事、2025年12月8日確認)。中国は国土が広いこともあり、遠方から来場する参加者には移動の負担が大きい。それにも関わらず、本会には毎年かなりの参加者がいる。地方からの参加者は、高速鉄道を利用するか、車で何時間も掛けて会場に来ていた。

本年度の会議で、開会式・円卓会議：色彩研究者の心得と思考・閉会式は共通の会場(2号楼小劇場)で開かれた。本年は講演者が多いため、一つの会場で全ての講演が行われる形式ではなく、2号楼小劇場・中国国際デザイン博物館会議庁・民芸博物館報告庁(図2)の三箇所に分科会会場が分けられた。中国の大学キャンパスは敷地面積が非常に広いことが多い。各会場が離れているために、校内巡回バスを利用するなどの移動手段の利用が望ましかったが、会議当日は講義が行われている曜日ではないためにバスが不足しており、会場間の移動に際してはやや困難を覚えた。

3. 2025 年度の中国伝統色彩学術年会のテーマ・構成

会議には伝統色彩学術年会という名称が冠されている一方で、招聘される専門家は文化・歴史の研究者に限定されていない。年会的な方向性は堅持されている様子がある。開会式で中国美术学院副院長・沈浩氏は、同大学党委員会書記の金一斌氏の挨拶を代読され、様々な分野の融合や体系化の促進、国際対話能力の推進など、外への視点の必要性について述べられていた。また、中国芸術研究院院長である周慶富氏による開幕の辞において、伝統色彩の創造的転換や革新的発展について言及された。いずれのコメントでも、伝統色彩研究に関して国際・学際的な視野の必要性が言及されている(図3)。

本会の創設者で中国国画院院長の牛克誠氏は、閉会



図2 会場の1つである民芸博物館の会場 著者撮影

の辞において、「西洋的な色彩学」とは異なる「中国伝統色彩体系」の追求という課題設定から10年間経過したことを感慨的にまとめられた。牛氏は、定量的・数量的な「価値」の尺度だけでは測りきれない「色彩」研究の意義とは何か、についても言及された。牛氏は冗談を交えながら日常の買い物で「社長」と呼びかけられる事と「富」との関連からの連想を語られ、伝統色彩研究を続けることで得られる「資産」について述べられた。実利が優先的に求められるこんにちの社会において、伝統色彩研究が実社会や生活に役立つ側面が求められることは当然としても、伝統色彩が持つ情緒面での意義や寄与を「富」であると牛氏は語られた。ともすると「金銭的な利益にならないから」と文化関連研究の予算が削減されがちな身近な状況と比較するに、本会議のように影響力のある研究・教育普及の現場から、その研究の価値についての宣言がある事は、羨むべき部分であると言って良い。

本会議全体のテーマは、「拾色・焕彩（色彩を拾い、輝きを甦らせる）」であった。さらに、三会場で八つに分けられた分科会は、「色彩文化：歴史と起源」「色彩文化：礼制と超越」「壁画色彩：考古と工芸」「染織色彩：技術と分析」「服飾色彩：制度と技法」「絵画色彩：継承と実践」「器物色彩：倫理と革新」「色彩応用：実践と変訳」と題され、それぞれ講演が行われた。各会場間の距離があるために、分科会単位ではなく講



図3 中国芸術研究院院長の周慶富氏の挨拶 著者撮影

演単位で聞きたい演題がある場合に、移動時間が足りずに講演を聞くことが難しい点は課題であろう。ただこれは、学術会議の会場規模・設備等に伴う避けがたい問題でもある。オンライン視聴できるシステムが併存していれば有り難かったが、オンライン配信を行う場合は以前の会議の様子から何万人もの視聴者に対応するための機器・回線のコストが想定されるため、ハイブリッド形式での会議開催は困難であると推察される。2025年も例年と同様、哲学・考古学・服飾・染色・建築装飾等、幅広い領域の専門家が会議に招聘されていた。さらに本年は、AIやデザインに関わる専門家も招聘されており、中国伝統色彩というテーマを介して、歴史・文化・芸術から、デザイン・人工知能等の知見まで学べる場となっていた。認知科学や心の哲学と東洋色彩の視点との関わりを述べた筆者の講演内容に関して、AIと伝統色名・概念をどう比較・関連させて考えるべきか、という質問が複数あった。会議は一般にも開かれており、学生・院生のみならず、デザイン関係の会社勤務をしながら伝統色彩研究に興味・関心を抱いている為に参加した聴衆も参加しており、筆者はそうした参加者からの質問も受けた。参加者とはWeChatを通じて議論を交わす等の研究交流が続いている。

4. 会議イベント：色彩之夜、円卓会議

2025年の伝統色彩学術年会は、会場が広いこともあり、また気候が北京よりは温かいためか、開催初日の夜に屋外イベントが企画された。「色彩之夜」と名づけられた当イベントは、伝統色彩学術年会開催10年を記念するイベントとして、10年間の会議内容を振り返る内容であった。開催以来10年間続く会議の歴代講演者の顔写真が示される等、継続参加者にとって感慨深い内容である。さらに、茶事の実演や音楽演奏、伝統的な舞踊も披露された(図4-1、4-2)。

本イベントの実施と運営には、中国美術学院の学生が関わり、配布されたグッズのデザインも同大のデザイン科の学生・大学院生が担当するなど、学術会議の開催に学生教育を盛り込んでいる点は、近年の学術会議のスタイルとして他国でも見られるものである(図5)。研究講演が数多く設定されている会議であるために、こうしたイベントは息抜きとして参加者が楽しめる内容であった。予算・人員規模・気候等に左右される面もあるため、こうしたイベントが開催されたのは、今回の開催会場ならではと言えるであろう。

もう一つのイベントとしては、「円卓会議・色彩研究者の心得と思考：中国伝統色彩研究過程における問題と対策」という座談会的討議が開催された。当該の円卓会議は、日本色彩学会誌4巻4号にて「特集：中国伝統色彩研究の今」に、論文「中国伝統色彩の文化的意蘊の知覚」を寄稿された汕頭大学長江芸術デザイン学院副院長・陳彦青氏を司会として実施された(図6)。その他の登壇者は、河南大学歴史文化学院教授・程民生氏、中国色彩博物館創設者・龐学元氏、染色無



図4-1 「色彩之夜」イベント：茶事 著者撮影



図4-2 「色彩之夜」イベント：舞踊 著者撮影

形文化遺産継承者・黄榮華氏，清華大学美術学院教授・賈璽增氏，中国美術学院教授・黄斌斌氏であった。本円卓会議でも AI の話題が出るなど，伝統色彩研究の領域にあっても人工知能関係の話題を無視できない状況にあると感じられた。また，分野横断的研究の必要性が座談会参加者から指摘される等，色彩研究における学際的な視点の追求は，日本における色彩研究と同様と言って良い。参加者に歴史・染色の専門家がいたこともあり，伝統的な色名と色相は必ずしも一定ではないことや，文献上の記録との比較の必要性，時代・地域の特性を示す色彩を安易に規定できない事等が議論された。当該の問題に関して，昨年度の会議後，上記の黄榮華氏から日本の色名に関して鋭い質問を筆者が受けたことを想起させられた。東洋の漢字文化圏において，こうした問題意識が継続的に共有されて行く事で，将来的な研究交流・協力の必要性和可能性を再確認させられたと言える。中国色彩博物館創設者・龐学元氏は，色彩研究に関する若手研究者の支援に取り組まれており，研究者の研究資金や生活のサポート等について語られた。中国の次世代の専門家育成や学術支援体制について，その方法の一端を知る事ができる内容でもあった。

開催会場である中国美術学院資深教授の宋建明氏は，本会閉会の挨拶において，伝統色彩学術年会在10年を経過し，結果として若い世代の研究者が増えたことは幸運である，と評されていた。学術研究の視



図5 中国美術学院の教員・院生によるグッズデザイン

点・課題を次世代へ繋いで行くことの重要性は言うまでも無い。そのためには，研究発表の場を設け，関連分野の研究を結びつけ，社会的関心を醸成し，次世代の研究者が研究に取り組みたいと思える環境作りが重要であろう。日本においても，次世代に研究を伝えられる体制を整えることは，大きな課題である。



図6. 円卓会議：色彩研究者の心得と思考